働問題セミナーへの協力を82年から，『海外から見た日本の労働像』の調査を87年から，ロシア連邦の労働関係者との交流事業を92年から，労働関係の国際化に沿って労働法についての各国との情報交換，共同研究を推進する国際労働フォーラムを93年から，それぞれ実施するなど事業の拡大，新たな分野の展開を進めてきた。運動体から事業体への転換であった。

『第９章　新しい世紀に向けて』～アジアにILO精神の普及を～

『エピローグ』

日本ILO協会は，アジア各国にILO協会を設立する運動に96年から取り組んでいる。その狙いは，厖大な人口と多様な文化のアジアに経済発展と社会的進歩の実現を目指すILOの理想の松明を打ち立てようというものである。韓国は，95年にILO協会を設け活動を始めたが，さらに中国に協会結成を呼びかけている。

また，ILO第９代事務局長に99年３月就任したファン・ソマビアは，就任演説で『ディーセント・ワーク』（こどもの教育，家族の保護，老後生活の保障などを受けられる労働）の構築を目指して，労働における権利，雇用，社会的保護, 社会的対話の４つの戦略目標を提案した。80年を経たILOを新しい世紀に再生しようという意気込みを痛感すると著者は述べている。

最後に，重大な岐路に立っているわが国は，経済発展に相応した社会的進歩を実現すべきであって，政・労・使の協力を謳ったILO精神によってのみ前進すると結んでいる。日本ILO史と共に生きてきた著者の叫びであろう。

３　所　感

本書は，わが国の政・労・使の３者関係の歴史をILOという国際労働機関とのかかわりを通じて見たものとも言えるが，ことの経緯を綴った単なる日本ILO史ではなく，その内側にいてその対立の焦点，事態の行方，関係者の人物の特徴などについてつぶさに知り得た著者による執筆だけに，迫力，物語性に富む文体となっている。また著者のILO精神の普及についての入れ込み方は凄まじく，幾度かの協会の危機を乗り越えさせるほどであって，それだけに『貧しきILO協会の王将』ともいわれたのである。筆者は，1960年代前半からわが国の労働問題の取材を続けているが，これほど興味を持って読んだ労働史は少ないと言えるだろう。

（工藤幸男著『日本とILO―黒子としての半世紀―』第一書林，1999年11月，181頁，定価2,190円＋税）

（いわせ・たかし　元NHK解説委員　労働評論家）

平塚真樹編

『労働者協同組合で働く青年たち

――日本労働者協同組合連合会センター事業団・事業所で働く青年層のキャリア意識調査報告』

評者：小関　隆志

１　問題の所在

はじめに，本書の背景をなしている問題の所在を若干述べておきたい。

労働者協同組合（workers’ co-operative, workers’ collective）とは協同組合の一種で，労働者が所有・経営管理する事業体である。世界的にはフランスやイタリア，スペインなどの南欧諸国で比較的発達しているが，日本においても近年増加しつつあるとはいえ，農協や生協などに比べて協同組合全体に占める割合はかなり小さく，知名度はまだまだ低いのが現状であ

る。

しかし，1980年のICA（国際協同組合同盟）モスクワ大会におけるA．F．レイドロウ博士の報告（レイドロウ著，日本協同組合学会訳編『西暦2000年における協同組合』日本経済評論社，1989年）を契機として，失業対策，経済民主主義，あるいはポスト産業社会論や協同組合論など実に様々な問題関心から，労働者協同組合に対して熱い期待が寄せられるようになった。その中で本書は，労働者の教育・発達の観点からアプローチした数少ない調査研究と言える。

日本の労働者協同組合には様々なタイプがあり，石見尚によれば6種類に分けられるが（石見尚『第三世代の協同組合論』論創社，1988年，175ページ），本書で取り上げている日本労働者協同組合連合会もその一つであり，「日本における労働者協同組合運動の中心をなす」とまで評価されている（富沢賢治「中高年雇用・福祉事業団の労働者協同組合運動」『大原社会問題研究所雑誌』394号，1991年９月，12ページ）。全日自労の失業対策事業打ち切り反対闘争から生まれた中高年雇用・福祉事業団は，自らを労働者協同組合と規定し，他の同様の組織とともに日本労協連を組織して，国際的な労働者協同組合運動組織CICOPAにも参加するようになった。

中高年雇用・福祉事業団については，上記の富沢賢治のほか，町田隆男，柳沢敏勝，内山哲朗，塚本一郎らが調査研究の成果を相次いで公表しており，本書もそれらに続くものであるが，本書の論点に関連して特に留意しておくべきは，中高年雇用・福祉事業団（ここではその中の中核的な全国組織である「センター事業団」を指す）の組織的特徴である。

労働者協同組合というとき，一般的に組合員間の均質性・同質性がイメージされるが，この事業団は組織上，本部と現場の実質的な二重構造をなしており，本部採用の職員と現場採用の労働者は人事・労働条件の面で明確に分かれている。すなわち，本部にいて現場を指導する幹部層，本部から現場に派遣されて現場労働者を指導する事業所長及び事務局員，それに職安などを通じて各事業所が採用する現場労働者，という異質な層のメンバーが組織を構成している。さらに，事業団は90年代以降，大学新卒者を事務局員として積極的に採用するようになり，若い新人事務局員が高齢の現場労働者を指導するという現象が多くみられるようになった。その中で，本書が取り上げる若い新人事務局員などの「青年労働者」は，末端管理職として組織の矛盾が集中する地位に立たされることになる。

無論，組織の二重構造は失業対策事業以来の歴史的所産でもあり，こうした組織構成自体の是非を論ずることは妥当ではない。また同事業団も組織の民主化に努め，「徹底民主主義」をスローガンに掲げている。しかしそれでも，こうした組織構成が実際に様々な内部矛盾を引き起こしていることは事実である。

2　本書の意義

労働者協同組合の組織運営が難しいという問題はよく知られているが，労働者協同組合運動を推進する立場の研究には，組織の抱える内部矛盾をありのままに直視しようという姿勢があまり見られない。その中で，特にこの事業団の組織矛盾を正面から取り上げたのが塚本一郎であった。事業体における労働者の民主的統制をテーマとする塚本はこの事業団の事例研究を行い，理事と一般組合員（＝現場労働者）の間で，意思決定能力や意識の面で大きなギャップがあること，一般組合員の多様性を認めるのではなく，一律に経営問題に一般組合員の関心を収斂

させようとしていること，などの問題点を明らかにした（塚本一郎「労働者協同組合における統制の構造と実態――日本労働者協同組合連合会センター事業団の事例に即して――」『大原社会問題研究所雑誌』432号，1994年11月）。こうした研究は，事業団の組織運営の問題点を客観的に明らかにした点で高く評価されるが，しかし本書のように，組織内で働く個々の人間に焦点を当て，特に組織の矛盾が集中する末端管理職の青年労働者の目線に降り立って，当事者の視点から組織の実態と問題点を解き明かした研究は，これまでほとんどなかった。その意味で，本書の研究はきわめて画期的であるといえよう。

なお，誤解のないように付け加えておくと，本書は組織内部の矛盾や問題点を解き明かすことを研究目的としているわけではないし，実際，プラスとマイナスの両面をバランス良く観察している。また評者としても，組織内部の矛盾や問題点を暴露しさえすればいいと考えているわけでは毛頭ない。にもかかわらずここで，本書の研究が組織の実態と問題点を明らかにした点を評価するのは，やはり実態をオープンにして直視し，問題を解決することなしに，運動の前進はありえないと思われるからである。本書の例で言えば，青年労働者の実態と問題点を明らかにした上で，彼らを支え育てていく体制を作っていくことが，労働者協同組合運動の前進にとって鍵となるのである。

本書の研究の意義は，組織の実態と問題点を解き明かすという点だけに求められるのではない。むしろ本書の目的は，教育学の視点から労働者協同組合で働く青年労働者の意識の発達を明らかにすることにある。教育学による労働者協同組合の実証研究としては，これまでに主体形成論のアプローチからの研究があり，現場労働者が経営・労働編成の主体となる過程を描き出す試みがなされているが，本書はそれと異なり，非営利・協同セクターの進展に伴う青年の職業意識の変容を主な問題関心とし，労働者協同組合は青年の意識の発達にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしようとする。

その意味で本書の問題関心は，労働者協同組合という例外的な組織に限られた問題にとどまらず，最近日本でもよく聞かれる非営利組織（NPO）や様々な協同組合をも視野に含むものである。企業社会の構図が崩れつつある今日，非営利組織の役割に社会から多くの期待が寄せられている。青年の「非企業社会的職業意識の広がり」を背景として，一般の営利企業ではなく非営利組織や協同組合を就職先として選択した青年は，現実の様々な矛盾や困難に直面する中で，いかなる意識の遍歴をたどるのか。非営利組織や協同組合は青年の期待に応え，また青年を育てる組織たり得ているのか。本書は労働者協同組合のみにとどまらず，さまざまな非営利組織や協同組合に重い問題提起を投げかけているといえよう。

3　本書の内容

本書は，平塚真樹・法政大学社会学部助教授と６名の大学院生が，日本労働者協同組合連合会センター事業団で働く青年に対して行った意識調査の報告書である。

調査にあたって筆者は，第三セクター（＝非営利・協同セクター）という「ポスト企業社会的な」経済領域が広がる一方，青年層の職業意識も従来の「一流大学→一流会社→出世」意識から次第に「非企業社会的職業意識」に変わりつつあるのではないか，と考える。そして，第三セクターの一部門である労働者協同組合において，そこで働く人々がどのように成長しあっていくのかを明らかにすること，が調査の目的である。

調査方法は，労働者協同組合センター事業団の事務局員として働く青年労働者を対象としたインタビュー調査と，「A事業所」における参与観察調査である。インタビュー調査では，13名の調査対象者に，一人当たり約2時間かけて，主に「入団の動機と経過」「その後の仕事の経過と印象深い出来事」「仕事の中で感じる喜びや意味」「同じく難しさやジレンマ」「働く中での自分自身や考え方の変化」「労協という職場についての今の理解や構え」について話を聞いた。

本書は主に以下の７章からなっている（括弧内は執筆者名）。

- ●調査課題・概要・凡例／調査参加者・執筆分担／謝辞
- ●１章　若者が「労働者協同組合」で働くということ（桐島次郎）
- ●２章　事務局員間にみられる意識の分岐とその背景（平塚真樹）
- ●３章　構成員間にみる文化的葛藤――新卒事務局員文化VS.組合員文化（三枝真由美）
- ●４章　労働者協同組合での事務局員の継続（朝井志歩）
- ●５章　「人の育つ組織」としての専門性（山口武士）
- ●６章　事業所ヒストリーから事業所の現在を読む（西村貴之）
- ●７章　労協と若者をつなぐもの――A事業所からみえてきたもの（住政二郎）
- ●調査のまとめと今後の課題

第１章では，労働者協同組合はどのような志向性をもつ青年たちに魅力的なのか，労働者協同組合が抱えるジレンマとは何か，その中で若手事務局員たちは，どのような場面に「手応え」を感じているのか，を考察した。結論としては，①青年は必ずしも明確な動機を持って就職してくるわけではないこと，②事務局員は本部と現場の間に立って重い責任を背負わされ，長時間の厳しい労働のため私生活を犠牲にせざるを得ないこと，③彼らは組織の掲げる理念とは異質な「一人一人が大事にされる」「気持ちよく働ける」など独自の意味を見出していること，などが明らかとなった。

第２章では，青年事務局員の間にどのような意識の分岐があり，それがどのような背景と結びついているのかを考察した。意識を規定する条件として性別や世代，生育環境や生育過程での経験，入職後の経験や出来事が挙げられるが，例えば「組織と人間のジレンマ」状況に際して，男性は組織拡大・事業発展を重視するのに対し，女性は職場の良好な人間関係の維持をより尊重するという違いが見られた。

第３章では，若い事務局員が高齢の組合員（＝現場労働者）とどのように関係を築いていったかを考察している。事務局員が組合員に対し，労働者協同組合の理念を言葉で理解させようとしてもうまく行かないが，逆に事務局員が組合員の持つ文化や視点を積極的に取りいれ，机上の勉強ではなく体験を通して学ぶことがむしろ有効であるという。

第４章は，事務局員の抱えている悩みに迫っている。事務局員の悩みとは，①理念と職場の現実のギャップが大きいこと，②組合員（=現場労働者）との関係の難しさ，③事務局員の仕事が責任も領域も拡大しやすく過剰な負担になること，④悩みの相談をしにくく，一人で悩みを抱えやすいということであった。従って，労働者協同組合には，事務局員の悩みをケアする体制作り，労働条件整備のための協議体制作り，経営教育の体制作り，人を評価する基準作りが求められる。

第５章では，事務局員と高齢の組合員との関係が一方的な「教え－教えられる」関係ではな

く，相互に影響を与え合う「発達の共受関係」にあることが分かった。

第６・７章は，青年労働者を中心としたＡ事業所における参与観察の結果である。第６章では，Ａ事業所の経営再建計画に多くの組合員が結集したが，その計画が本部の指導で実施を先送りされた結果，事務所の組合員の結集が弱まってしまった経緯が活写されている。第７章では，Ａ事業所で働く青年労働者（組合員）は，非営利的な仕事のあり方に魅力を感じるというよりも，むしろ職場の人間関係に魅力を感じることが明らかとなった。

本書を通して見えてくる青年の意識は，意外にも労働者協同組合の掲げる理念とは一歩距離を置いた，本書の表現を借りれば「『理念』として提示されている労協像よりも『柔らかく』『等身大』な」意識であった。また現場で組合員（＝現場労働者）と日々向き合う苦労が容易なものではなく，青年労働者が労働者協同組合という組織の中で成長・発達する上で，なお多くの解決すべき課題が残されていることもみえてきた。

以上のように本書は，労働者協同組合で働く青年の意識を見事に描き出している。なお，本書に対して若干の要望を付け加えておきたい。

本書の末尾にも「今後の課題」が明記されているので，私の要望が無い物ねだりであることは承知の上だが，労働者協同組合（を含む第三セクター）で働く青年の意識は，青年全体の中でどの程度一般的なのか。また，第三セクター以外（特に民間企業）で働く青年の意識と，いったいどの程度の違いがあるのだろうか，という疑問がある。民間企業で働く青年は，どのような意識を持って就職し，また就職後その意識はどのように変容をとげたのか。第三セクターと民間企業の青年を比較することによって，特徴がより客観的に明らかになるのではないかと思われる。

なお，本書の入手に関しては発行者のほか，協同総合研究所（〒171-0032豊島区雑司が谷3-22-10，電話.03-5391-4321，FAX.03-5391-4325）に問い合わせされたい。

（平塚真樹編『労働者協同組合で働く青年たち』法政大学社会学部平塚研究室発行，1999年８月，108ページ，300円）

（こせき・たかし　法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）